The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アフリカから中国への留学生移動の新たな形態と構造 ー留学動機、進路選択、帰国意志に着目してー
Author(s)	Luo, Fangzhou
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/96205
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　LUO FANGZHOU　）	
論文題名	アフリカから中国への留学生移動の新たな形態と構造 ―留学動機、進路選択、帰国意志に着目して―

論文内容の要旨

本研究の目的は、中国の大学における、サブサハラ・アフリカ（以下ではアフリカ）出身の学生の留学動機、進路選択及び帰国意志に着目して分析し、アフリカから中国への留学生移動の新たな形態と構造について検討することである。

世界の高等教育機関における留学生数は急速に増加している。欧米諸国は留学生の過半数を受け入れてきたが、近年、中国などの新興国は、英語プログラムや奨学金制度を積極的に設置して留学生を受け入れようとしている。その結果、新興国の留学生受け入れ数が増加し、留学生の獲得において欧米諸国との競争が激化している。一方で、留学生の送り出し国を見ると、2020年時点でアジアからの留学生が全体の54%を占める。アフリカからの留学生数は、世界全体のわずか7%であるが、2000年の18万人から2020年の42万人へと著しく増加している。人口増加の途中にあるアフリカ諸国では、中等教育を修了した学生数が継続的に増加するにもかかわらず、高等教育へのアクセスが限定的で、かつ教育の質が保障されていないため、今後留学生の増大が見込まれる。

これまでは、アフリカ出身の留学生にとって、言語的親和性の高い英語圏やフランス語圏、また歴史的なつながりの深い旧宗主国への留学が一般的であったが、近年、アフリカから中国への留学生移動が活発化している。優秀な留学生を高度人材として取り込もうとしている欧米諸国とは異なり、中国は「一帯一路」の沿線諸国の留学生を積極的に受け入れており、アフリカは「一帯一路」の重点地域として設定されている。中国政府は、かなり限られた層にしか中国での就労を期待しておらず、一般的には卒業した留学生を自国に帰国させて、中国企業の海外進出などに協力させることを期待している。それと同時に、中国政府は一部の優れた起業家精神を持つ若者が中国に滞在し、起業して新しいビジネス活動を展開することを望んでいる。

これまでの研究では、学生の留学動機と留学中の修学経験は考察されているが、伝統的な留学生受け入れ国である欧米諸国の事例に偏っており、新興国への留学に着目した研究は限られている。留学動機と修学経験を個別に分析した研究が多く、両者の関連性を十分に示していないという課題もある。また、進路選択に関して、多面的な視点から留学生の進路選択のプロセスを分析しているが、伝統的な留学先国での就労及び永住権取得に偏っており、新興国に留学している学生の多様な進路選択については十分に検討されていない。さらに、移民に関する先行研究の課題として、移民の複雑な個人背景による帰国意志に関する矛盾した見解があることが挙げられる。この他に、先行研究の検討を通じて、留学と就労・移住は密接に関連しており、両者を架橋する研究が必要であることが明らかになった。しかし、頭脳循環に関する先行研究では、移住先での就労と帰国を扱っているものがあるものの、留学で得られた成果や留学先での経験と、頭脳循環とを関連付けて論じているものは限られている。

本研究の特徴は、欧米を留学先とした伝統的な留学生移動ではなく、アフリカから東アジアにおける新興国である中国への留学生移動に焦点を当てることにある。また、中国とアフリカの両方でフィールド調査を行い、対面でインタビュー調査を実施したことに本研究の独自性がある。本研究の学術的意義に関しては、アフリカ人留学生の中国に留学する動機を検討することで、欧米留学のプル要因と異なる要因を明らかにすることができる。また、進路選択に影響する要因を考察し、先行研究で指摘されている要因と比較することで、中国の文脈で生まれた独特な要因が表出する可能性がある。さらに、本研究は留学の教育面に着目するだけでなく、アフリカ人留学生を潜在的なトランスナショナル移民として捉えることで、卒業後の帰国意志を検討し、これまでの移民研究における矛盾した見解を再検討することができる。

アフリカから中国への留学生移動は1950年代から始まっており、中国の政治・経済体制の変化に伴い、留学生受け入れの特徴は変化しつつある。2000年以降、中国・アフリカ協力フォーラム（FOCAC）において、アフリカとの全方位的な協力関係の指針が示されている。FOCACを土台に、中国とアフリカの貿易往来は確実に増加しており、教育の面でアフリカからの留学生への中国政府奨学金支給拡大の動きは継続している。

本研究のフィールド調査では、留学生数の増加が顕著であるアフリカからの学位取得型留学生に焦点を当てた。具体的には、調査地とした中国の大学におけるアフリカ出身の学位取得型留学生及び卒業者を調査対象者とし、半構造化インタビューを行った。インタビューで収集したデータの分析方法として、解釈的現象学分析（Interpretative Phenomenological Analysis）を使用した。留学動機と修学経験に関する調査では、中国東南部の福建省にある、アモイ大学（Xiamen University）を調査地とし、12人を調査対象者とした。進路選択に関する調査では、中国東部の浙江省にある浙江師範大学（Zhejiang Normal University）を調査地とし、11人を調査対象者とした。また、中国で働く留学生の教育から就労への移行プロセスに焦点を当てるため、北京における北京理工大学（Beijing Institute of Technology）と北京師範大学（Beijing Normal University）を卒業し、中国で就労している5人を調査対象者にした。帰国意志に関する調査は、ガーナ人留学生に着目して中国とガーナの両方で行い、18人を調査対象者とした。

各調査から得られた知見に関しては、第4章から第7章にまとめた。第4章では、アフリカ人学生の留学動機と修学経験を検討した。留学動機を類型化した結果、セカンドチャンス型、キャリアアップ型、言語・文化・都市関心型、家族戦略型という4つのパターンが明らかになった。その上で、中国がアフリカ人留学生を惹き付ける理由とその背景を明らかにした。具体的には、高度な英語力と充実した奨学金制度の活用、中国とアフリカの経済関係の深化を背景にしたキャリア形成、修学経験を通した留学の新たなプル要因の形成が挙げられた。留学動機は多様化しつつあり、伝統的な国家的枠組を中心としたプッシュ・プル要因の分析枠組みだけでは、適切に捉えることはできない。そのため、新しい留学生移動において、個々の留学生に着目し、その留学動機と修学経験を継続的に分析することが重要であることを指摘した。このような分析の視点は、本研究で取り上げたアフリカから中国への留学生移動だけでなく、他の留学生移動を考察する際にも適用することが可能である。一方で、アフリカ人学生が中国に留学するという選択肢が増える過程に、アフリカにおける新たな教育格差が形成されていることを提示した。

第5章では、アフリカ人留学生の進路選択の変容プロセスとそれに影響する多様な要因を分析した。本章の結果から、アフリカ人留学生の一部は中国に到着後、簡易な受験システムと豊富な奨学金受給の機会を活用し、継続的に大学の選定を行っていることが明らかになった。また、調査対象者は留学前のキャリアプランの有無に関わらず、留学中に形成した人間関係が進路選択に大きく影響していることも示された。その中で、大学の周辺にある充実したビジネス環境において、人間関係の形成がビジネス活動へとつながっている。要するに、アフリカ人学生は留学の付加価値を見出し、ビジネスを展開するという独特の留学の便益を得ている。加えて、留学中に育まれた友人関係によって就労の機会を得たこともわかった。さらに、中国の給与水準と労働文化がアフリカ人留学生を惹きつけていることが明らかになった。一方で留学生が、中国のビジネス面における団結力のある文化の影響を受けた結果、それを母国で実践し、母国の発展に貢献する意欲が高まり、帰国意志につながったことが示唆された。この他に、アフリカ人留学生はコロナ禍に対する中国政府の対応策を活用し、修士課程への進学と奨学金受給の機会を得ていることもわかった。

第6章では、中国の大学を卒業したアフリカ人留学生に焦点を当て、彼らの大学教育から就労への移行プロセスを分析した。欧米諸国を中心とした先行研究と比較することで、アフリカ人留学生の進路決定や移行過程に影響を与える多様な要因を明らかにした。調査対象者は、卒業後に中国に滞在することを最初から決めていたわけではなく、在学中に就労する機会を見つけて滞在につなげている。留学生のネットワークが、大学、地域、出身国の境界を越えて、ソーシャルメディアを通じて構築されていることが明らかになった。中国での就職や起業に成功するために、与えられたチャンスに加えて、就職活動への粘り強さや優れた研究能力、起業家としてのイノベーション能力などが重要であることもわかった。本章における調査対象者の起業活動は、中国とアフリカ諸国との間の頭脳循環に重要な貢献をする可能性を秘めている。このような留学生の教育から就労への移行プロセスは、注目に値することを示唆した。

第7章では、中国に留学したガーナ人学生に焦点を当て、彼らの帰国意志とそれに影響した要因を個人的背景と関連づけて分析した。留学動機の分析でよく使用されている「プッシュ・プル」枠組みを帰国意志で援用し、枠組みの適用範囲を広げた。そして、経済的要因、心理的要因と状況的要因が、調査対象者の帰国意志に大きな影響を与えていることが浮き彫りになった。しかし、個人的背景によってその要因が異なり、同じ要因でも、影響の与え方は異なることがわかった。特に、家族の絆は、家族の状況や個人の価値観の違いによって、帰国決定に影響を与えるプッシュ要因にもプル要因にもなりうることが明らかになった。また、状況的要因において、今までの研究で指摘されていない要因として、若者の成功したビジネスが違法行為として疑われるという若年層に対する不信感が留学生の帰国意欲を妨げていることもわかった。この他に、ガーナ人留学生と中国は頭脳循環の受益者であり、ガーナにとってその利益が不安定であることが明らかになった。頭脳循環をより深く理解するためには、帰国者と非帰国者を単純に分類するのではなく、個人の意思決定の動機やその背景にある文脈を検討することが重要であることを提示した。

終章では、アフリカから中国への留学生移動の形態と構造について考察した。まず、国家レベルから見ると、アフリカから中国への留学生移動は、中国政府が主導するものである。アフリカ人留学生の受け入れは、中国の国家政策

（一帯一路）の展開をサポートするためにあり、本研究では「国家政策主導型」としてまとめる。それに対して、アフリカ人学生は留学先の選定と進路選択の両方において、経済的な便益を受けていることが顕著である。そのため、個人レベルでは、アフリカから中国への留学生移動は、「経済便益誘致型」としてまとめる。このような留学生移動は、世界の留学生移動に大きな影響を与えており、アフリカ人留学生獲得競争を激化させている。さらに、固定化していたアフリカと欧米諸国の間にある教育的従属関係という構造を打破していく。一方で、中国・アフリカ協力フォーラムに基づき、アフリカと中国の間に全面的なパートナーシップ関係が構築されているが、留学生を受け入れる中国は主導権を握っており、送り出すアフリカ諸国は、中国政府の政策や方針に依存する受動的な側に位置づけている。このように、留学生を送り出すアフリカ諸国は、積極的な主導権を握ることが難しい状況において、アフリカと中国の間に「新たな教育的従属関係」という構造が構築され始めていることも言える。

最後に、本研究の社会的意義について議論した。日本を含む伝統的に留学生を受け入れてきた先進国の多くが、人口減少社会に突入し、留学生なくして高等教育を維持することが困難な時代となり、今後増加するアフリカ人留学生を獲得することは、ますます重要になる。中国と同じく東アジアにあり、英語は公用語ではない日本にとって、アフリカ人留学生への奨学金数を大幅に増加させることと、アフリカにおける日本語教育を大規模に推進することは困難であるかもしれない。しかし、中国のように、留学申請と奨学金申請の入口を一本化するなど、日本の留学システムを調整することは可能であろう。また、日本への留学を検討するアフリカ人学生を増やすために、日本への留学の魅力と便益が伝わるような情報発信の改善も重要になる。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　LUO FANGZHOU　）			
論文審査担当者		（職）	氏　名
	主 査	教授	澤村　信英
	副 査	教授	杉田　映理
	副 査	教授	白川　千尋

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国の大学における、サブサハラ・アフリカ（以下、アフリカ）出身の学生の留学動機、進路選択及び帰国意志に着目し、アフリカから中国への留学生移動の新たな形態と構造について検討したものである。これまで欧米諸国が留学生の過半数を受け入れてきたが、近年、中国などの新興国は、英語プログラムや奨学金制度を充実させ、積極的に留学生を受け入れようとしている。アフリカ出身の留学生にとって、言語的親和性の高い英語圏やフランス語圏、あるいは歴史的なつながりの深い旧宗主国への留学が一般的であったが、中国は「一帯一路」の沿線諸国の留学生を優先的に受け入れており、アフリカはその重点地域として設定されている。

本論文は、序章と終章に加え、７章から構成されている。第1章は先行研究の検討、第2章は中国とアフリカの関係の深化、第3章が調査概要と分析方法についてである。そして、第4章から第7章において一連の研究の結果が提示され、終章の成果と意義へとつながる。本研究の特徴は、中国（厦門、浙江、北京）とアフリカ（ガーナ）の両方でフィールド調査を行い、アフリカから中国への留学生移動について、留学動機から修了後の就業にわたるまで、進路選択や帰国意志などの個々人の家族関係などを含め、質的に分析しているところである。

まず、第4章では、アフリカ人学生の留学動機と修学経験を検討している。留学動機を類型化した結果、セカンドチャンス型、キャリアアップ型、言語・文化・都市関心型、家族戦略型という4つのパターンに整理した。中国がアフリカ人留学生を惹き付ける理由として、高度な英語力と充実した奨学金制度の活用、中国とアフリカの経済関係の深化によるキャリア形成、修学経験を通した留学の新たなプル要因の形成が挙げられている。一方で、中国へ留学するという選択肢が増える過程でアフリカにおける新たな教育格差が形成されていることも示唆している。

第5章では、アフリカ人留学生の進路選択の変容プロセスとそれに影響する多様な要因を分析している。そこで明らかになったことは、アフリカ人留学生の一部は中国に到着後、簡易な受験システムと豊富な奨学金受給の機会を活用し、継続的に大学の選定を行っていることである。また、調査対象者は留学前のキャリアプランの有無に関わらず、留学中に形成した人間関係が進路選択に大きく影響していることも示された。

第6章では、中国の大学を卒業したアフリカ人留学生に焦点を当て、彼らの大学教育から就労への移行プロセスを分析している。ここでは、アフリカ人留学生の進路決定や移行過程に影響を与える多様な要因を明らかにしている。その大きな役割を果たしているのが留学生間の人的なネットワークであり、大学、地域、出身国の境界を越えて、ソーシャルメディアを通じて構築されていることも明らかになった。

第7章では、中国に留学したガーナ人学生に焦点を当て、帰国意志とそれに影響した要因を個人的背景と関連づけて検討している。そして、経済的要因、心理的要因および状況的要因が、留学生の帰国意志に大きな影響を与えていることが浮き彫りになった。しかし、同じ要因でも影響の与え方は異なり、特に家族の絆はその状況や個人の価値観等により、帰国決定に影響を与えるプッシュ要因にもプル要因にもなりうることを解明した。

このような本論文で明らかになったことを踏まえ、終章では、本研究の中核的な問いでもある、アフリカから中国への留学生移動の形態と構造について、「国家政策主導型」および「経済便益誘致型」として整理し、考察している。そして、このような関係性は、固定化していたアフリカと欧米諸国の間にある教育的従属関係という構造を打破していく一方で、留学生を送り出すアフリカ諸国は、積極的な主導権を握ることが難しい状況において、アフリカと中国の間に「新たな教育的従属関係」という構造が構築され始めていることに言及している。

以上より、本論文は博士（人間科学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。